

文書等並べて辿る、家康、松平一族・家臣

徳川家康 75年の生涯 年表帖

下巻・後編

第4巻
(全4巻)



「徳川氏が世襲していく」ことを天下に示した家康は、
豊臣氏を滅ぼし、大名・朝廷・仏教等を統制し
「元和偃武」を成し遂げた！

目次

はじめに～この本の使い方～..... 2

目次年表..... 3

徳川家康75年の生涯年表帖(下巻・後編) 4～256

あとがき、奥付..... 257

はじめに～この本の使い方～

この本は、家康が將軍職を秀忠に譲り、駿府に退隠・「大御所政治開始」等から「大坂の陣」、「元和偃武」を成し遂げるまでの家康中心の戦国期の年表で、日付までを記載しています。一部不明な月・日付に関しては、「―」で割愛をさせて頂いたり、「下旬・この月」などと、表記しておりますのでご了承下さい。

特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等や家康文書、家康に関わった事などは、太字等で記載しております。

本体となる戦国年表はそこそこな分量となっております。紙面の関係で目次年表は、わずか1ページと圧縮しております。

～太陰暦・太陽暦について～

本書での月日の表記は全て和暦を採用しており、一部、西暦の表記とはズレが生じています。

日本では、明治5年12月3日(＝明治6年1月1日(西暦1872年1月1日))までは太陰暦(旧暦・天保暦)を、それ以降は太陽暦(新暦・グレゴリウス暦)を使用しています。

そのため、太陰暦である和暦(旧暦・天保暦)の月日と、それに対応する太陽暦である西暦(新暦・グレゴリウス暦)の月日は一致しません。ご注意下さい。

なお、太陰暦(太陰太陽暦)の1年は太陽暦の1年に比べて約11日短く、このズレは3年で約1月分(約33日)となります。

このため約3年に1度、余分な1ヶ月(閏月)を挿入して1年を13ヶ月とした閏年を設けることで、ズレを解消しています。

なお、閏月は閏●月と表記し、仮に閏4月があった場合、これは通常の4月の後に閏月(閏4月)が挿入されていることを示しています。

例) 秀忠、征夷大將軍宣下: 慶長10年4月16日(西暦: 1605年6月2日)

西暦 和暦	月日	出来事	No.
慶長8(1603)	3月―	「慶長期天下普請」。家康が江戸城の拡張に着手、慶長期天下普請と呼ばれる、全国の大名を動員しての大工事がはじまる。	8907
慶長10(1605)	4月16日	家康は2年で征夷大將軍を辞する。秀忠、征夷大將軍宣下を受け2代將軍となる。	9255
慶長11(1606)	3月20日	家康65歳、駿府を「大御所政治」の拠点の地と定める。	9394
慶長12(1607)	7月3日	「同年七月三日、本城方百廿間、其石垣高さ七間、或は九間、天守台成就、神宮移徙」(『駿国雜記』)。家康、修築成った慶長期駿府城に移る一大御所政治がはじまる。	9577
慶長13(1608)	3月11日	「慶長期二回目駿府城本丸御殿等完成」。突貫工事のすえ、竣工した駿府城の屋形に、家康がこの日、移る。	9651
慶長14(1609)	7月25日	半世紀続いたポルトガル、スペイン両国の日本貿易独占は、終わりを告げる。	9824
	10月17日	「宮中乱交事件(猪熊事件)慶長14年7月4日～慶長16年4月」。家康、「宮中乱交事件」の猪熊教利を上京の上善寺で斬刑に処す。	9858
慶長15(1610)	閏2月3日	家康、徳川領国の要衝に一門大名を配置し終える。	9916
慶長16(1611)	3月28日	家康70歳、豊臣秀頼19歳と会見。	10077
慶長17(1612)	3月21日	江戸幕府最初のキリシタン禁教令。	10357
	5月6日	「岡本大八事件―慶長14年12月9日～慶長17年5月6日」。事件によって、肥前国日野江藩(後の島原藩)4万石の有馬晴信が死罪を賜る。	10404
慶長18(1613)	5月6日	「大久保長安事件―慶長18年5月6日～慶長19年7月27日」、はじまる。	10648
	11月―	家康、天海を日光山別当とする。	10813
慶長19(1614)	2月1日	大久保長安事件―大久保忠隣改易。	10882
	3月8日	和子入内、内意。	10915
	7月26日	大御所家康、方広寺鐘名に異議を唱える。	11098
	10月1日	大坂冬の陣(10月1日～12月22日) 一大坂城討伐令。	11244
	11月17日	「大坂冬の陣」。徳川家康、摂州住吉に陣取る。家康供奉衆がこの日より甲冑を着す。	11448
	12月19日	大坂冬の陣(10月1日～12月22日) 一講和条件が合意。	11619
慶長20(元和1)(1615)	4月4日	幕府、大坂参陣の諸將に軍法及び道中条目を頒つ。	11811
	4月26日	大坂夏の陣―開戦(郡山城の戦い)。	11852
	5月8日	大坂夏の陣―大坂城落城、豊臣家滅亡―元和偃武。	11904
	7月7日	戦国時代が終わる―「武家諸法度」(元和令)を發布。	12078
元和1(1615)	7月17日	幕府、「公家諸法度」(のち「禁中並公家諸法度」)を公布。	12105
	7月24日	「五山十刹諸山之諸法度 一東班西」7ヶ条ら、家康、朱印状・掟書発給。	12127
元和2(1616)	4月17日	徳川家康、没。	12347

慶長8	2月12日	幕府、知恩院の寺地を拡大し、諸堂を造営。	8870
	2月13日	豊臣三中立・生駒親正(1536〜1584)、讃岐国高松城で没。享年78。慶長6年(1601)に、東軍の会津出兵に参加した一正(1555〜1610)が、家督を継いでいる。	8871
	2月14日	公卿・殿上人が伏見城登城して、家康の將軍宣下を祝う。	8872
	2月―	「 謹上天曹地府十二冥官等都状 」。徳川家康都状。 都状とは、陰陽道で行われる祭りに奉られる祭文。	8873
	2月20日	「 此御朱印なくして伝馬いたすへか 」。家康、朱印状発給。	8874
	2月20日	この日、秀頼へ年頭の総礼あり。諸公家、大坂へ下向する。	8875
	2月21日	徳川家康(1543〜1616)、上杉景勝(出羽国米沢藩30万石)(1556〜1623)に、江戸桜田に屋敷地を与える 。初代江戸家老は、千坂景親(1536〜1606)。 大名宅地下付の初めとなる 。	8876
	2月25日	「正倉院を修理」。東大寺の三庫の修理が完成、本多正純(1565〜1637)と大久保長安(1545〜1613)が監督する。	8877
	2月28日	徳川家康、在江戸の黒田長政に御内書を送り、海賊禁止令を伝えるという。	8878
	2月―	この月、徳川家康、諸大名に、江戸市街地の造成・運河開削を命じる。水路を整備するための工事を以下の諸大名に命じた 。 一番組は越前宰相秀康(これに属する者四人)、二番組は上杉黄門景勝(同三人)、三番組は本田中務大輔忠勝(同四人)、四番組は蒲生藤三郎秀行(同十八人)、五番組は伊達越前守政宗(同一人)、六番組は生駒讃岐守一正(同十八人)、七番組は細川越中守忠興(同十人)、八番組は黒田甲斐守長政(同三人)、九番組は加藤主計頭清正(同三人)、十番組は浅野紀伊守幸長(これに属する者、池田少将照政(輝政)、堀尾信濃守忠晴、蜂須賀長門守至鎮、山内対馬守一豊、加藤左馬頭茂勝(嘉明)、中村一学忠一、池田備中守長吉、山崎左馬允家盛、中川修理大夫秀成、有馬玄蕃頭豊氏、前田主膳正茂勝の十一人)。江戸市街地拡張は豊臣系の有力大名達約70家に及び、千石に対して一人を賦課した動員は「千石夫」と言われた。	8879
	2月―	この月、彦根の地に城を築く事が許可される。	8880
	2月―	この月、井伊万千代直継(直勝)(井伊直政の長男)(1590〜1662)、正五位下に叙され右近太夫に改める。	8881
	2月―	この月、家康の寵愛を受ける藤松(池田忠継)(1599〜1615)、わずか5歳で備前国岡山藩28万石に封じられた。忠継は、姫路藩52万石の池田照政(のち輝政)の次男(実 ^{じつ} は五男とも)。母は徳川家康の次女・督姫。異母兄の利隆(1584〜1616)が、執政代行として岡山城に入り、忠継は父の姫路城に留まる。	8882
	2月―	前田利長(1562〜1614)・利常(1594〜1658)父子、伏見に赴きて、徳川家康及び秀忠に謁す	8883
	3月3日	伏見城で上巳の祝い。 「上巳」は上旬の巳の日の意味であり、元々は3月上旬の巳の日であったが、古来中国の三国時代の魏より3月3日に行われるようになったという。	8884
	3月3日	江戸日本橋、開通。	8885
	3月5日	「 人足四人、伏見よりかまくら迄可 」。家康、宿中に朱印状をもって伝馬を命じる。	8886
	3月7日	本多正信(1538〜1616)、上杉景勝からの家康將軍宣下の祝賀に対し、答謝する。 正信は関ヶ原合戦後に直江兼続と共に上杉氏の存続に奔走した。	8887
	3月7日	山科言経等が二条城を見学する。	8888

慶長8	3月9日	「京より糸とまで伝馬三疋、人そく」。家康、朱印状をもって伝馬を命じる。	8889
	3月11日	「 長橋局を將軍の御直廬と為す 」。家康、永井直勝(1563〜1626)を宰相勸修寺光豊(1576〜1612)に派遣、直廬の事を協議させる。直廬とは、皇親・摂関・大臣・大納言などが宿直・休憩を行うために宮廷内に設置された部屋のこと。参内殿の東方に長橋局がある。長橋局いわゆる勾当内侍は近世において奥向一切を統轄し、外部との諸般の交渉もあったから、禁中に絶大な権力をもっていた。職掌からその居室は広大であった。局は北側に上ノ間・ニノ間・三ノ間が並び、西側に玄関以下五間、湯殿並びに台所がついていた。	8890
	3月21日	森忠政(1570〜1634)、信濃国川中島藩13万7千5百石の所領から美作国津山藩18万6千5百石へ、加増転封。忠政は多くの家臣を連れて川中島を出発し、21日美作国入国、27日美作国府であった院庄(岡山県津山市)に到着。忠政は美作国鶴山に築城することを願ひ出て家康に許され、慶長9年(1604)春に築城にかかり、鶴山を「津山」に改める。元和2年(1616)3月の完成まで13年の歳月を要した。	8891
	3月21日	「 二条城、大略完成 」。徳川家康、伏見から入洛、新営の二条城に初めて入る。 明経博士・舟橋秀賢(1575〜1614)が訪れ、対面する。当時は、二条の新御所または新屋敷と呼ばれたという。天守落成は慶長11年(1606)。	8892
	3月23日	2千石で家康に仕える小出遠江守秀家(秀政の次男、吉政の弟、母は大政所の妹)(1567〜1603)、没。享年37。秀家は上杉景勝征討の時、大坂方ながら家康に従い、関ヶ原にも向かい軍功を挙げていた。家康はその早すぎる死を惜しんで改易にはせず に、秀家養子として弟の三尹(1589〜1642)への家督相続を許す。	8893
	3月24日	黒田長政、江戸より上洛、二条新御所の家康に拝謁。 夜、舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れる。家康は秀賢に対面する。	8894
	3月25日	「 將軍拝賀の式 」。巳下刻(10時)、徳川家康、二条城から華やかな行列で参内、伝奏・公家衆は、禁裏唐門でこれを迎える。行列の一番は雑色。二番は御物の公人朝夕人、御物奉行、同朋衆全阿弥(谷新六郎正次(後に内田姓))ら。三番は御出奉行板倉勝重。四番は隨身左右各8騎。五番は白張横一列7人。六番は諸大夫步行左右各8騎。七番は御車(家康)、布衣左右各9人、太刀持本多康俊、布衣の侍。八番は本多忠勝ら騎馬諸大夫左右各5騎。九番は乗輿之衆(上杉景勝、毛利秀元、結城秀康、細川忠興、京極高次、池田照政(輝政)、福島正則)。(『当代記』)。 家康は衣冠束帯で將軍拝賀の式を行う。家康、後陽成天皇(第107代)に銀子1千枚、新上東門院(勸修寺晴子)に銀子2百枚、近衛前子(中和門院)に銀子2百枚、政仁親王(後の第108代後水尾天皇)へ銀子百枚、長橋局に銀子50枚などを献上。午下刻(12時)退出する。	8895
	3月25日	加藤清正(肥後国熊本藩52万石)(1562〜1611)、従四位下肥後守叙任。 清正、この月、江戸上屋敷の工事に着手。	8896
	3月25日	山内一豊(土佐藩9万8千石)(1545〜1605)、従四位下に昇叙し、土佐守に転任する。	8897
	3月26日	今回叙された四位と五位の武家が、拝賀のため参内。	8898
	3月26日	舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れ対面する。 秀賢は、下級の公家であるが、自らの才能を生かし徳川家康を始め多くの人々と交流を保っており、家康昵懇の公家衆22人のうちの一人である。	8899
	3月27日	「 將軍祝賀の儀 」。後陽成天皇(1571〜1617)、二条城に勅使を派遣。徳川家康の將軍就任祝賀として馬代黄金3枚、太刀を下賜。正式の將軍宣下が行われる。	8900

慶長8	3月27日	江戸幕府、「諸国鄉村掟五か条」を定め、逃散農民の帰村・直訴などについて定める。 徳川家康 、領主・代官の非分(違法行為)による逃散と、直訴(ただし年貢率の件は除く)を容認。「百姓むざと殺し候事、御停止たり」(百姓斬り捨て禁止令)を出す。代官・領主・地頭に向けて、関東総奉行青山常陸介忠成(1551~1613)と内藤修理亮清成(1555~1608)が取り扱う。 慶長7年(1602)12月6日 定(郷村掟3ヶ条) 黒印状を以って地頭に命じたもの、同年同日定(郷村掟5ヶ条) 黒印状を以って百姓に命じたものに継ぐものであった。	8901
	3月27日	諸家 、徳川家康のもとに礼に赴く。	8902
	3月28日	禁中の女房衆から家康の將軍宣下の祝が、二条御所に届く。	8903
	3月28日	諸門跡、二条御所に参上、將軍宣下の祝賀を行う。	8904
	3月28日	午刻(11~13時)、舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れ対面する。	8905
	3月29日	諸門跡、徳川家康のもとに礼に訪れる。	8906
	3月ー	「 慶長期天下普請 」。家康が江戸城の拡張に着手、 慶長期天下普請 と呼ばれる、 全国 の 大名 を動員しての 大工事 がはじまり、この月、 神田山 が削られ、 日比谷入江 が埋め立てられ 掘割(外濠川) が整備される。 加賀の前田利長、仙台の伊達政宗、肥後の加藤清正、熊本の細川忠興の外様大名、また譜代大名では結城秀康(家康の次男)、松平忠吉(家康の四男)、本多忠勝ら東西70余りの大名たちは、家康の命令でこの月には神田山の開削や入江の埋立、更に江戸城域拡張のための敷地確保などを行った。低地の埋め立て地である城東・城南に外様大名の屋敷を配置し、また埋立地には江戸の町の元となる町屋が集められ、そこには商工業者が移された。城西の半蔵門外から神田橋門外の台地に旗本・御家人を住まわせた。関ヶ原の戦い後の大名の編成変えを行っても、裏で豊臣に気脈を通じた有力な諸大名が西国を固めていた。これら外様の諸大名たちの静けさが家康には気になる。そうした静けさを潰すため、家康は城造りに専念した。江戸城の修築は、寛永13年(1636)、三代將軍徳川家光の最終工事を持って、徳川家三代に渡る大工事が完了した。	8907
	4月1日	公家衆、二条城に行き將軍家康に拝謁。	8908
	4月1日	二代目茶屋四郎次郎(清忠)(?~1603)、急没。長崎奉行長谷川藤広の婿養子となっていた弟(清次、又四郎)(1584~1622)が三代目を継ぐ。	8909
	4月2日	舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れる。3日も。	8910
	4月4日	徳川家康 、4日間にわたり「 新宅(二条城) 」に宴を張り、 公家・大名 を饗して、 將軍宣下 の 祝能 を 催す 。6日には、山科言緒、冷泉為満、四条隆昌、水無瀬氏成、烏丸光広が訪れる。	8911
	4月6日	「伝馬三疋從江戸伏見迄可出之者也」。家康、宿中に朱印状をもって伝馬を命じる。	8912
	4月7日	家康が能を催す。日野資勝、猪熊教利、阿野実顕、烏丸光広、竹内孝治が訪れる。	8913
	4月8日	舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れる。	8914
	4月10日	「 景德寺住持職事、任先例可執務之 」。家康、梵意首座に公帖。 公帖とは、禪宗寺院のうちの、五山、十刹、諸山などの官寺およびそれに準ずる寺院の住持任命の辞令。	8915
	4月10日	「 景德寺住持職事、任先例可執務之 」。家康、金剛証寺有昕首座に公帖。	8916
	4月11日	舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れる。	8917
	4月13日	舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れる。14日・15日も。	8918

慶長8	4月16日	秀忠 、 源朝臣秀忠 として 右近衛大将 を兼任。	8919
	4月16日	徳川家康 、 伏見城 へ帰る。	8920
	4月19日	「 家康 、 征夷大將軍就任 の 礼 に 天覧碁 を 催す 」。後陽成天皇(1571~1617)、將軍徳川家康の奏請に依り、本因坊、利玄、仙角、道石等の囲碁を御覧あらせらる。 家康は征夷大將軍就任の礼に、碁好きの後陽成天皇のために当代最高の碁打である本因坊算砂、利玄院日義上人、安井仙角(仙也の子)、道石(中村道碩)の四人を集め宮中で天覧碁を打つ。4局打たれ、天皇が最上座でそのほかの公家などが対局しているスペースを囲んでいたという。	8921
	4月22日	豊臣秀頼11歳 、 内大臣宣下 を受ける。勅使は大納言広橋兼勝、参議勧修寺光豊。 武家では家康に次ぐ高い官職であった(家康は將軍任官の際に、内大臣から右大臣へ転任。家康昇進による欠員の補充)。	8922
	4月28日	家康妹・矢田姫(1562~1603)没。57歳。矢田姫は、徳川十六神将の一人、長沢松平家8代松平康忠(1546~1618)の正室で、嫡男松平康直(1569~1593)をもうけた。 矢田姫父は松平広忠で、家康の異母妹である。	8923
	4月ー	「 長崎奉行のはじめ一家康 、 長崎貿易 の 管理 に 直接乗り出す 」。 この月、幕府、初代長崎奉行(小笠原為信入道一庵)を配置し直轄とする。家康は、豊臣氏の蔵入地を収公し長崎行政は江戸幕府に移管された。3月ともいう。 家康は豊臣時代からの長崎代官・寺沢広高を解任した。そして、家康はキリシタン撲滅を図り、徳川氏による九州支配の橋頭堡を築いた。	8924
	4月ー	「阿国歌舞伎の初見」。この月、出雲の巫女と称する阿国が、男装をして茶屋女と戯れる「かぶき踊」を始めた。後には、出雲大社本殿修復のための勧進として北野社に「かぶき小屋」を設け、拠点とする。文禄年間に出雲大社勧進のため諸国を巡回したところ評判となったとされている。	8925
	5月4日	「小笠原越中広朝死して、その子権之丞某家継がしめらる」(『寛政重修譜』)。 幡豆小笠原氏の小笠原越中守広朝(?~1603)が没。家康は、子の権之丞に継がせる。これだけの記述である。実は権之丞は、徳川家康の隠し子の一人とされる。洗礼名ディエゴ。家康の手がついた母が懐妊したまま家臣の小笠原広朝の妻となったため、広朝の子として成長。小笠原信元(1544~1612)の弟である父広朝の死後、家康に仕えるが、慶長17年(1612)3月、キリスト教に帰依していたという理由で改易となる。慶長19年(1614)、大坂の陣が起ると大坂城に入城し、豊臣方として奮戦。夏の陣において天王寺表で戦死したと伝えられる。	8926
	5月5日	伏見城(山城国)の徳川家康邸に、冷泉為満、山科言緒、六条有広、四条隆忠、舟橋秀賢が礼に訪れる。	8927
	5月6日	出雲の阿国的一座、女院御所に召され「かぶき踊」を演じる。	8928
	5月8日	「この月、元の北条の臣山角紀伊定勝卒す。こは小田原の北条に仕えて、督姫君小田原へ御入輿のとき御媒し参らせし御ゆかりをもて、北条滅びて後千二百石賜りしかど、定勝年老たりとて辞退し山林に世を避けて、今年七十五歳終をとりしなり」(『寛政重修譜』)。家康に仕えて相模国で1200石を与えられた山角紀伊守定勝(1529~1603)、この日、没。	8929
	5月10日	大蔵卿御(?~1615)、淀殿(茶々)の末妹・お江の上洛につき、迎えるために近江へ下る。	8930
	5月15日	徳川秀忠(1579~1632)の娘・千姫(1597~1666)、母お江(後の崇源院)(1573~1626)に伴われ、伏見城(家康再建)に入る。	8931

慶長8	5月19日	「大内より広橋大納言兼勝卿、勸修寺宰相光豊卿御使として薰袋五十進らせらる。この日、神龍院梵舜(1553~1632)は伏見城に登り拜謁し、神祇道並びに日本紀の事ども尋ね問わせ給ふ(『舜舊記』)。後陽成天皇(1571~1617)、勅使(勸修寺光豊、広橋兼勝)を遣し、將軍徳川家康に匂袋を賜う。	8932
	5月26日	冷泉為満、山科言緒、舟橋秀賢、徳川家康のもとを訪れ対面する。	8933
	5月27日	「今度於上洛者、有御上度候由承候、未しかとの儀も無之候、縦罷上候とも御上之儀者御無用候、誠被入念候段、令満足候、猶本多佐渡守可申候、恐々謹言」。徳川秀忠、中納言上杉景勝が上洛の供を申し入れた事に謝辞を述べ、まだ上洛があるかどうかははっきり分かっておらず、供は無用であるとの書を送る。	8934
	5月29日	本多正信(1538~1616)、上杉景勝に秀忠書状副状を送る。	8935
	5月一	この月、出羽国久保田藩(秋田藩)初代20万石・佐竹義宣(1570~1633)、久保田城(秋田市千秋公園近辺)の築城をはじめる。	8936
	5月一	「毛利黄門輝元入道宗瑞江戸に参り大納言殿に拜謁す」(『寛政重修譜』)。	8937
	6月7日	島津家当主島津忠恒(のちの家久)(1578~1638)、伊藤平左衛門をして唐船奉行に命じ、薩摩領内の外国貿易に関する規定3ヶ条を定める。唐人保護を求めた忠恒は、唐船貿易を推進したという。	8938
	6月8日	幕府、京中の博奕を禁止する。	8939
	6月12日	お江、義演(1558~1626)への返礼として単物一ツ・生帷一ツを進上する。	8940
	6月15日	家康十男・長福丸(後の徳川頼宣)(1602~1671)、伏見城にて髪置の式。髪置は、幼児が頭髮を剃ることをやめて伸ばしはじめるときの儀式。	8941
	6月17日	義演、お江へ返礼として揚梅一折を、お江の侍女へ札を遣わす。	8942
	6月25日	家康、大津より舟に乗り近江国志那(滋賀県草津市支那町)の蓮花を遊覧。	8943
	6月一	この月、東本願寺の地(烏丸以西の六条と四条の間に地)に仮御堂が建てられ、教如光寿(1558~1614)が裏方の住居から移る。表方が准如光昭(西本願寺第十二世宗主)(1577~1630)である。越後・佐渡の真宗寺院、東本願寺派となるもの多かったという。	8944
	7月3日	家康、伏見から二条城に移る。	8945
	7月5日	「神龍院梵舜二条へまう登り拜謁す」(『舜舊記』)。	8946
	7月6日	「一条前関白内基公、照高院門跡道澄、准后聖護院門跡興意法親王、妙法院門跡常胤法親王、飛鳥井宰相雅庸卿、西洞院宰相時慶卿二条城へ登り拜謁せられ、御宴ありて御物語数刻に及ぶ」(『西洞院記』)。一条内基(1548~1611)、照高院道澄(1544~1608)、聖護院門跡興意(1576~1620)、妙法院門跡常胤(1548~1621)、飛鳥井雅庸(1569~1616)、西洞院時慶(1552~1640)が、二条城の家康に拝謁。	8947
	7月7日	「大坂より尼孝蔵主をはじめ女房等を二条城に召され、猿楽催され饗応せられ、蔵主及び長野局等は止宿す。これ姫君御入興の事議せらるゝためなるべし(『西洞院記』)。家康、尼の孝蔵主をはじめとして女房らを二条城に招き、二日間に渡り能を催す。	8948
	7月10日	「神龍院梵舜まうのぼり御けしきうかゝふ」(『舜舊記』)。12日も。	8949
	7月15日	家康、二条城から伏見城に帰る。	8950
	7月24日	「連歌師里村紹叱(昌叱)(1539~1603)没す。歳は六十五。紹巴が死せしのちは、新治筑波の道にをいて海内の宗匠と仰がれ、柳営年々の御会にも必ず召されし所なり(『寛永系図』)。	8951
	7月26日	若公家衆、風流踊を催す。	8952

慶長8	7月28日	「千姫、秀頼と婚姻」。「今日、大坂秀頼御祝言、江戸大納言御娘也」(『舜舊記』)。秀忠の娘・千姫(7歳)(1597~1666)が、豊臣秀頼(11歳)(1593~1615)に嫁ぎ、伏見城(家康再建)から船で大坂城に興入れし、大久保忠隣(大久保忠世の長男・相模国小田原藩6万石)(1553~1628)が付き従う。道中は諸侯によって警護され、大坂側では浅野幸長(紀伊国紀州藩37万6千石)(1576~1613)が迎えた。北政所おね(1549?~1624)は、秀吉の遺言であった秀頼と千姫の婚儀を見届けたことを契機に落飾。10月3日には、朝廷から院号を賜り、「高台院湖月尼」と称した。この日程は、千姫母であるお江の方と秀頼の母である淀殿が相談して決めたものという。『舜舊記』は、神道家で神龍院の住持、豊国神社の社僧である梵舜(1553~1632)の日記。	8953
	7月28日	大坂城豊臣秀頼婚礼祝賀能が、大坂城で三日間に渡り行われる。	8954
	7月28日	「自日本到大泥国舟也、右、慶長八」。家康、渡海朱印状発給。	8955
	7月29日	「自日本到西洋舟也、右、慶長八年」。家康、渡海朱印状発給。	8956
	7月29日	「一為城州東山常在光寺屋敷、井山」。「山城国常在光寺の事により相国寺に御朱印を下さる。その文に云う。山城国東山常在光寺の寺地山林の替地として、朱雀西院の内にて百石寄附せらる。永く進止相違あるべからずとなり(『国師日記』)。家康、相国寺に判物発給。	8957
	7月29日	「円光寺領之事 山城国朱雀吉祥院」。家康、判物発給。	8958
	7月一	「佐渡の国人等訟うる旨あるにより、銀山の吏吉田佐太郎は切腹し、合沢主税は改易せられ、中川市右衛門忠重、鳥居九郎左衛門某、板倉隼人某、佐渡国中を検視せしめらる」。この月、徳川家康、佐渡の国人の訴えを入れ、佐渡代官・吉田佐太郎・中川主税らを処罰する。	8959
	8月1日	伏見城にて八朔が祝われ、門跡・公家も参加する。	8960
	8月2日	「豊川弁才天領之事 参河国宝飯」。「三河国室飯郡豊川村弁財天祠の別当三明寺に御朱印を賜う。その文に云う。三河国室飯郡馬場村のうち二十石、先例にまかせて寄附せらるれば、神供祭礼等怠慢すべからずとなり」。家康、朱印状発給。	8961
	8月3日	「小堀新助正次御使として、石見の安原伝兵衛が積年銀鑛の事に心用ひしを褒せられて、備中と名のらしむべき由大久保石見守長安に仰せ下さる(『銀山記』)。この日、徳川家康は、小堀新助正次を御使いとして、奉行・大久保長安(1545~1613)の下、石見銀山で採鉱の成績が著しい山師・安原因繁(伝兵衛)を褒賞した。伝兵衛は、さらに家康より受領名「備中」を許された。	8962
	8月4日	大坂城豊臣秀頼婚礼祝賀四座立合能が、大坂城千疊舗で行われる。	8963
	8月5日	「美濃国恵那郡三拾貳箇村五千四百」。「遠山民部少輔利景に美濃国志那土岐兩郡に於て六千五百三十一石六斗余の采邑を賜る。安原備中改称を謝し奉り伏見へまう上る。御前に召して着御の御羽織御扇を賜はる。備中頓首して落涙に及ぶ(『貞享書上』)。家康、遠山民部少輔(遠山利景)(1540~1614)に朱印状をもって知行充行。遠山利景は、関ヶ原の戦い(東濃の戦い)の功で旧領回復を成し遂げ、美濃国恵那郡と土岐郡において6,531石の知行地を与えられた。	8964
	8月6日	「一、先年両長老へ語言つかまつり、三千石之知行納取事」(『多武峯文書』)。家康、多武峯領・多武峯学頭領、三千石の朱印状を下付。	8965
	8月9日	これより先、淀殿(茶々)(1569~1615)、秀頼のために明経博士舟橋秀賢(1575~1614)へ、貞永式目仮名注の執筆を依頼。この日、それが出来上がる。「貞永式目」は、貞永1年(1232)成立の武家社会最初の成文法。	8966

慶長8	8月10日	家康十一男・鶴千代(後の徳川頼房) (1603～1661)、伏見城にて生まれる。 母は、側室お万の方(養珠院) (1577～1653)。お万の方は、上総勝浦城主・正木邦時の娘として生まれ、戦乱で逃れた伊豆の地等で成長した。17歳のときの文禄2年(1593)三島で徳川家康に江川英長(江川太郎左衛門)の養女として御目見とも、沼津本陣で徳川家康(52歳)に見染められ側室となったともいう。その美貌・知性ゆえ、元和2年(1616) 75歳で没する家康の晩年において、最も寵愛された女性の一であったという。	8967
	8月12日	秀頼、大坂城秀頼邸にて婚儀の祝いを受ける。始めに摂関家の礼と振舞、続いて清華家の礼と振舞。続いて一献・太刀の進上あり。	8968
	8月13日	舟橋秀賢 (1575～1614)、片桐且元 (1556～1615) を訪ねる。且元同道で大坂城へ登り、淀殿(茶々)より依頼の貞永式目仮名抄(上下二冊)を進上する。秀賢、淀殿(茶々)より且元を通じて帷一重・袷一・銀子5枚を拝領する。秀賢、秀頼・淀殿(茶々)へ錫酒鍋三ツを進上する。西刻(17～19時)退出の後、淀殿(茶々)より改めて見事な出来を感謝する旨の返事が来り、帷一種・袷一・銀子5枚を拝領する。	8969
	8月14日	「下総国関宿城松平主因幡守康元卒す。その子甲斐守忠良に遺領四万石を襲しめらる。この康元は久松佐渡守俊勝が二子にて、はじめ三郎太郎と称す。母は伝通院殿なり」。下総国関宿藩 (千葉県野田市関宿三軒家) 開藩初代4万石の松平康元 (家康の異父弟) (1552 ? ～1603)、没。享年52。嫡男の忠良(1582～1624)が家督を継ぐ。	8970
	8月15日	門跡衆(妙法院二品宮 常胤・聖護院二品宮道澄・醍醐寺義演准后・梶井無品最胤・一乗院尊勢准后・竹内無品 良恕・実相院義尊)が、秀頼の婚儀につき、祝賀のために登城する。その振る舞いにつき、義演、「大関御所御威光未相残了、珍重／＼」と記載。	8971
	8月17日	狩野光信 (1565 ? ～1608) は、徳川秀忠の殿舎に京都及び大内裏や、大坂の図を描く。京都の徳川秀忠邸(二条城)とされる。	8972
	8月18日	豊国祭。秀頼の名代として片桐且元が装束にて参詣、金子1枚・鳥目百貫文を馬代として奉納する。且元退出後の午後、吉田兼見・兼治・慶鶴丸(萩原兼従)へ銀子5枚・帷袷を贈る。勅使として中山慶親が束帯にて参詣奉納する。北政所おねは、東山阿弥陀ヶ峰の秀吉廟所へ参拝し、豊国社へは孝蔵主を遣わし銀子10枚を奉納する。また、吉田兼見・兼治・慶鶴丸など神官らへ進物する。神龍院梵舜(1553～1632)、慶鶴丸の叙爵について、西笑承兌より権少副を兼する旨を聞く。西笑承兌 (1548～1608)は、慶長6年3月より寺社の事を家康から任され、差配していた。	8973
	8月18日	この日から28日かけて、家康は、三河国等社寺30ほどに、朱印状をもって安堵等。	8974
	8月20日	「廿日、三河国額田郡妙心寺室飯郡八幡に小坂井村のうちにて九十五石、天王社に篠塚村にて十石。財賀寺に財賀村にて百六十一石余、東漸寺に伊奈村にて二十石。賀茂郡龍田院に高橋の庄瀬間村にて七石五斗。遠江国長上郡神立神明に蒲郷にて三百六十石、豊田郡八幡宮に中泉村にて十七石、敷智郡応賀寺に中郷にて三十八石、清源院に中郷にて十七石。各社領寺領を寄附したまふ」(『寛文御朱印帳』)。	8975
	8月21日	「廿一日、遠江国府八幡宮に同国とよ田郡にて社領二百五十石をよせられ、御朱印を賜う(『寛政重修譜』)。	8976
	8月22日	「廿二日、三河国碧海郡長岡寺に中島村にて十石の御朱印を賜う」(『寛文御朱印帳』)。	8977
	8月24日	「廿四日、美濃衆高木権右衛門貞利 (1551～1603) 死して、その子平兵衛貞盛家を継がしめられ、庇陰料三百石を合わせて二千三百石余になる」(『寛政重修譜』)。	8978

慶長8	8月26日	「廿六日、三河国額田郡万松寺舞木八幡宮に山中舞木村にて百五十石、室飯郡西明寺本宮に長山村にて二十石、華井寺に牛窪郷中村にて三十六石、富賀寺に宇利庄中村にて二十石、渥美郡常光寺に堀切郷にて二十六石七斗、幡豆郡妙喜寺に江原村にて十六石二斗の御朱印を賜う(『寛文御朱印帳』)。	8979
		家康、朱印状を以って山中八幡宮(愛知県岡崎市舞木町宮下)に150石を寄進。	
	8月27日	「廿七日、島津少将忠恒薩摩国より、宇喜多前中納言秀家、その子八郎秀親に、桂太郎兵衛並びに正興寺文之と云える僧を添え、大勢護送して伏見に至る。よて秀家庚子逆謀の巨魁なれば、大辟に處せらるべしと云えども、忠恒があながちに愁訴するのみならず、その妻の兄なる加賀中納言利長無二の御味方なりし故をもて、その罪を減じ遠流に定められ、先ず駿河国に下して久能山に幽閉せしめらる。やがて八丈が島へ流さるべきがためとぞ聞えし」。	8980
		関ヶ原で敗れた宇喜多秀家(元備前国岡山城主) (1572～1655)、薩摩国大隅郡牛根郷から伏見へ護送される。島津家と徳川家の和議により、秀家は徳川家へと引き渡されることとなった。	
	8月28日	「廿八日、三河国加茂郡妙昌寺に山田村にて廿石、碧海郡犬頭社に上和田宮地村にて四十三石、引佐郡方広寺に井伊郷奥村にて四十九石余、幡豆郡龍門寺に下町村にて十一石、遠江国周知郡一宮に一宮郷にて五百九十石、社領寺領を御寄附あり(『寛文御朱印帳』)。	8981
	8月29日	「相州瑞泉寺住持職事、任先例可被」。家康、公帖。	8982
	8月29日	「知恩院、徳川家香華寺となる」。 「廿九日、伏見より御上洛ありて知恩院へならせ給い、御建立の事仰せ出さる。知恩院はかねて親忠君(三河国の松平氏宗家第四代松平親忠)の五子超誉(存牛)住職(二十五世)せられし地なり。かつ当家代々の御宗門浄土宗の本山なればなるべし」(『舜舊記』)。 この日、徳川家康 (1543～1616) は伏見より上洛して、京東山の知恩院を参詣、この寺を徳川家香華の寺と定め、堂舎の建立を発願。	8983
	8月一	「この月、伊達越前守政宗江戸より暇給はり就封し、去年新築したる仙台の城に移る。よて鷹並びに金若干を賜はる」。 この月、陸奥国仙台藩初代60万石の伊達政宗(1567～1636)、築城成った仙台城に入城。	8984
	9月1日	「九月朔日、神龍院梵舜伏見に登り御けしき伺ふ」(『舜舊記』)。	8985
	9月2日	「二日、山口駿河守直友より島津龍伯入道に書を贈り、宇喜多中納言秀家この日伏見より護送して駿河国久能山に下らしむ。彌次罪を減ぜられ身命を全くせしめらるれば安心すべき旨を告る(『貞享書上』)。 宇喜多秀家(元備前国岡山城主) (1572～1655)、島津・前田家両家からの嘆願で、家康から助命は約束され、駿河国久能山へと移される。	8986
	9月3日	「三日、豊後国臼杵城主稲葉右京亮貞通卒しければ、長子彦六典通に遺領五万六千石を継がしむ」。 豊後国臼杵藩初代5万石の稲葉貞通 (1546～1603)、没。享年58。長男・典通 (1566～1626)が継ぐ。	8987
	9月3日	家康に近仕する叔父・松平右衛門大夫正久(正綱) (1576～1648)の養子・松平三十郎(正永、後の伊豆守信綱) (1596～1662)、将軍世嗣の徳川秀忠に拝謁。	8988

慶長8	9月5日	大久保長安 (1545～1613)、千村平右衛門良重 (1566～1630) をして、山中代官所領内百姓の年貢弁済を督促せしむ。戦功により千村平右衛門良重は、幕府の交代寄合となり、美濃国内の美濃国の恵那郡・土岐郡・可見郡における4,600石を知行地とし、信濃伊那郡の天領11ヶ村 (上伊那の榑木買納め5ヶ村、下伊那の榑木割納め6ヶ村) を預地とした。また天竜川流域の信州・遠州船明山榑木奉行も務めた。	8989
	9月9日	「伊勢りやうくう、しやうせんくうの事先例」・「一内宮知行方可為守護不入事 付」。 「九日、伊勢慶光院に御朱印を下さる。伊勢両宮遷宮の事先例に任せとり行ふべき也。これは応仁このかた四方兵革の中なりし故、伊勢両宮荒廃きはまる事百年に過ぎたり」。家康、伊勢国度会郡 (三重県伊勢市宇治浦田) のけいくわう院 (慶光院周養) 上人、内宮二郷年寄、内宮年寄・外宮三方に朱印状。	8990
	9月10日	この頃、幕府、京市中に盗賊が横行し、治安維持と相互監視を目的に「十人組制度」を設け、連座制を敷く。12月ともされる。	8991
	9月11日	「十一日、武田五郎信吉君卒去あり。こは第五の御子にてはじめ万千代君と申し参らす。御生母は甲斐の武田が一族秋山越前守虎康が女おつまの局、後には下山の方と称す」。慶長7年に封ぜられた常陸国水戸藩15万石の武田 (松平) 信吉 (家康の五男) (1583～1603)、没。享年21。これにより武田氏は再び断絶。	8992
	9月11日	「西楽寺領之事 一参拾石 本尊修」。家康、西楽寺 (静岡県袋井市春岡) に、朱印状をもって上・下字刈郷の寺領安堵状。このから25日にかけて、家康は、三河・遠江の社寺等に朱印状をもって安堵。家康は將軍宣下後、一時豊臣家臣領であった所での支配を揺るぎないものとすべく、寺領寄進の朱印状発給した。	8993
	9月11日	「美濃国山県郡赤尾村五百式拾壹石」。家康、保々長兵衛に朱印状をもって知行充行。美濃山県郡・中島郡に1000石を与えられた保々則貞 (1570～1641) であろうか。	8994
	9月12日	大久保石見守 (長安)、木曾衆千村平右衛門宛に書状を送る。美濃木曾の政策は、代官頭・美濃国奉行大久保長安が主導していた。	8995
	9月15日	徳川家康、鴨江寺 (静岡県浜松市中区鴨江) に寺領宛行朱印状を発給。	8996
	9月16日	大坂城にて、秀頼祈祷のために大般若経が義演を導師として、転読される。転読の後、義演ら秀頼に対面し、布施を賜る。またこの日、千姫からも賜物あり。	8997
	9月17日	禁中で童男のかぶき踊がある。	8998
	9月19日	「十九日、遠江国敷智郡普濟寺に浜松寺島村にて七十石、大通院に浜松庄院内門前の地、長上郡龍泉寺に蒲東方飯田郷にて三十石。龍秀院には有玉村にて二十五石六斗余、甘露寺には万解村にて二十石余、宗安寺に市柳村にて十三石六斗余、引佐郡龍潭寺には井伊谷祝田宮日のうちにて九十六石七斗余。浜名郡金剛寺に中郷にて五十石、蔵法寺に白須賀村にて十三石、豊田郡寶珠寺に岡田郷にて三十二九斗余、三河国渥美郡龍根寺に吉田村にて二十五石余、幡豆郡法光寺に法光寺村にて十三石寺領を下され御朱印を給ふ (『可睡齋書上』)。	8999
	9月21日	「大樹 (家康) へ参、御振舞有之、無御出座了、十日已前ニ御息民部大輔 (武田信吉) 殿御逝去也、不可説、ゝゝゝ、」。 (『言経卿記』)。 武田信吉 (家康の五男) が没し、悲しむ家康のお出ましは無かったという。	9000
	9月21日	「廿一日、遠江国榛原郡平田寺に相良庄平田村にて五十石の御朱印を下さる (『可睡齋書上』)。	9001
	9月25日	「一伊勢従宮川内三宮内知行方可為」。家康、外宮年寄共に朱印状。	9002

慶長8	9月25日	「廿五日、三河国室飯郡上谷寺に牛窪村にて廿石、遠江国豊田郡光明寺に二俣山東村一円、佐野郡叡福寺に原谷村にて廿五石余、青林院に原谷村にて十七石、大雲院に垂木村にて十七石。長福寺に原谷村にて十四石、旭増寺に原谷村にて十二石、永源寺に名和村にて十二石、山名郡海江寺に堀越村にて十六石、福王寺に西貝塚村にて十二石余、松秀寺に筈野村にて十二石、圓明寺に柴村にて十八石、豊田郡積雲院に友長村にて二十四石、雲江院に小出村にて十五石、一雲齋に野辺村にて十五石、玖延寺に二俣郷珂藏村にて二十石、増参寺に向坂村にて十三石、学圓寺大宝寺に高岡捻領方村にて八石余、赤地村にて五石八斗。合て十三石八斗余、天龍寺に野辺村にて九石、周知郡崇信寺に飯田村にて十五石、雲林寺に中田村にて十二石寺領を寄附し給ふ (『寛文御朱印帳』)。	9003
	9月27日	肥後国熊本藩52万石の加藤清正 (1562～1611) の伏見屋敷が焼失する。	9004
	9月28日	「道明寺領之事 河内國」。家康、「任先規」 (先規 (信長・秀吉朱印状) に任せ) と記し、さらに「竹木門前諸役免許」 (山林竹木の伐採・収納を許可し、門前 (附属地) の諸役免除の特権) を追加する寺領寄進状を道明寺 (大阪府藤井寺市) に発給。	9005
	9月29日	去廿日仁和殿 (覚深法親王) (一宮十六才) ・梶井殿 (承快法親王) 新宮 (二宮十二才) 御参内御中ナヲリ云々、大樹 (家康) 御執奏也云々、」。 (『言経卿記』)。 後陽成天皇の第1皇子覚深法親王 (1588～1648) と同第2皇子承快法親王 (1591～1609) を、家康が仲直りさせたそうだ。	9006
	9月30日	「遠路使者殊入念、砂糖千斤到来、喜悅候也、」。家康、嶋津修理入道 (島津義久) に贈物砂糖千斤到来を謝す。	9007
	9月一	この月、幕府、江戸の防火の神として、芝に愛宕神社を創建する。	9008
	10月2日	「条々一大坂・てんほう・尼崎・」。家康・幕府、旧により、河村与三右衛門 (河村与惣右衛門、のち角倉与一) ・木村宗右衛門 (木村惣右衛門勝正) に、淀川過書船支配の朱印状を下賜する。	9009
	10月3日	北政所おね (1549? ～1624)、長橋局よりの女房奉書を、使いの後陽成天皇乳母より賜り、「高台院」の院号を朝廷より賜る。 おね、直ちに返礼し、新上東門院 (勧修寺晴子) へ白銀20枚・とんす5巻、女御近衛前子へ白銀20枚・とんす5巻、長橋局へ白銀10枚・小袖一重、天皇乳母へ白銀10枚・小袖一重を贈る。	9010
	10月5日	「日本国 源家康 復章 安南国大都統」。 徳川家康、安南国 (ベトナム北部) に対し返書と長刀等を贈る。また商客 (角倉了以) の願いにより安南国渡海朱印状を下賜す。通船朱印状は、大泥国三通、呂宋一通、安南二通、暹邏二通、西洋三通、東京一通、東埔寨一通とされる。	9011
	10月6日	家康、知恩院を永代菩提所と定め、秀吉の寄進した寺領の三倍にあたる知恩院に寺領七〇三石余を寄進。 翌年、家康は、生母伝通院殿菩提のために寺域拡張・諸堂舎造営等の工事を命じ、青蓮院の地を割き寺地堂舎を造堂する。	9012
	10月6日	お江 (後の崇源院) (1573～1626)、先日、義演 (1558～1626) から贈られた巻数の礼として杉原を50帖進上する。	9013

西暦1636

寛永13 4月- 三代将軍家光の東照社大造替が成る。同年、ご神体が新しい社殿へと移される。12418

西暦1645

正保2 11月3日 朝廷より、東照社に宮号が宣下され、「日光東照宮」となる。12419
これ以後、朝廷から毎年4月17日の東照宮例祭に日光例幣使が派遣されることになった。(['東武実録']）。
日光東照宮には将軍や大名・公家にとどまらず、武士や庶民等、多くの人が参詣に訪れるようになる。また、江戸では家康命日にあたる4月17日に、東照宮を勧請した諸寺社で法業が催されたり、浅草寺・護国寺・王子権現社等に勧請された東照宮の参拝が許可された。将軍家の菩提寺である増上寺では、ふだん立ち入ることが出来ない場所へも参拝できた。
このように、江戸庶民にとっては年中行事の一つとして、東照宮が受容されていった。さらに、日光東照宮では参詣者が増えていくことに伴い、多くの案内書が刊行された。
有名なものとしては、八王子千人同心組頭・植田孟縉著の『日光山志』、江戸新橋で仕立て屋を営んでいた竹村立義が著した『日光巡拝図誌』(文政元年(1818))などがある。

西暦1646

正保3 3月10日 家光の奏請により、東照宮に例幣使が派遣される。(朝廷より、毎年進物を奉納する日光例幣使が開始)。同時に、伊勢神宮への例幣使が再興される。12420

あとがき

本書(下巻・後編)は、慶長8年(1603)2月の家康の征夷大将軍就任後からはじまり、秀忠に将軍職を譲り、駿府に退隠、大御所政治の開始を経て、慶長19年(1614)「大坂夏の陣」、翌年「同冬の陣」で豊臣氏を滅ぼし、大名・朝廷・仏教等の統制で、家康が「元和偃武」を成し遂げるまでの、家康の軌跡を記載しました。“文書等並べて……”と銘打ち、調査、編集をはじめたのですが、想定より家康・秀忠及び家臣らの文書が多く、編集の進捗状況・頁数・定価等鑑み、下巻は前編・後編の2巻に分ける事とし、全3巻から全4巻とすることといたしました。当初の予定と変更することになり、お問い合わせいただきました方々、上巻・中巻をご購入いただきました方々、ご協力いただきました方々にあらためて深くお詫び申し上げます。

家康等の文書はもっとはるかに多い物と思われそうですが、文書等は写しも多く、写し間違いや、年比定等、通説に疑問を呈する物も多いこともありますことなども、ご了承下さいませ。
本書で激動の徳川家康天下統一の時代を垣間見て頂き、読者の皆様の「徳川家康像」等考察の些かでも参考にをなりましたら幸いです。
編集にあたり、主に、「上巻・中巻」掲載の主要参考図書や他の当社「戦国年表帖」、国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、写真提供などしていただいた愛知県・静岡県の自治体及び各機関様、また、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

写真協力(上巻・中巻・下巻)
(一社)豊橋観光コンベンション協会 豊明市観光協会 岡崎市 田原市博物館
安城市教育委員会 蒲田市観光協会 新城市観光協会 長久手市 静岡県観光協会
浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 掛川市 藤枝市郷土博物館 清水町教育委員会
鳥越一朗 (順不同)

文書等並べて辿る、家康、松平一族・家臣
徳川家康75年の生涯年表帖 下巻・後編 第4巻(全4巻)

「徳川氏が世襲していく」ことを天下に示した家康は、豊臣氏を滅ぼし、大名・朝廷・仏教等を統制し「元和偃武」を成し遂げた！

第1版第1刷
発行日 2024年1月1日
デザイン 岩崎宏
編集・制作補助 ユニプラン編集部 橋本豪
発行人 橋本良郎
発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>
(E-mail) info@uni-plan.co.jp
〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76
TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990
振替口座／01030-3-23387
印刷所 株式会社ティ・プラス
定価はカバーに表示してあります。
ISBN978-4-89704-590-0 C0021